

2021年5月16日 久宝教会 復活節第7主日礼拝(アジア・エキュメニカル週間)

メッセージ「真実から目を逸らさない」

牛田匡牧師

聖書 ルカによる福音書 24章36-53節

今回の聖書は、『ルカによる福音書』の一番最後に記されているお話で、イエス様が天に上げられる、いわゆる「キリストの昇天」と呼ばれているお話でした。キリスト教の絵画には、雲に乗って空の上に昇っていく絵がありますので、ご覧になった方もいらっしゃるかもしれません。勿論、そのような絵を描き遺した画家たちも、実際の場面を見ているわけではなく、この聖書の物語から、イメージを膨らませて描いているわけです。2000年前の実際の現場では、一体何が起こったのでしょうか。この「キリストの昇天」という物語を読む時、私たちは「この物語は頭で理解することは難しいけれど、心で信じることは出来るはずだ」といって読むのではなく、その中に込められているメッセージにこそ心を向けたいと思います。

さて36節は、いきなり「こう話していると」という言葉から始まっていますが、これは前の35節までのお話から続いていますよ、ということです。具体的にはエルサレムの町のある家の中に弟子たちが集まっていて、そこで復活されたイエス様と出会ったという仲間たちの話を聞いたり、話したりしていた時に……、ということです。どうやらその中には、エマオの町への道すがら、見知らぬ旅人と一緒になって歩いて行ったら、実はその怪しい男こそ、復活されたイエス様だと気付いたという仲間もいたようです(ルカ 24:13-25)。すると突然、イエス様が彼らの真ん中に立って「あなたがたに平和があるように」と言われました。いきなりそんなことを言われると驚くかもしれませんが、この言葉は、人々の日常の挨拶の言葉であった「シャーローム」というヘブライ語を、ギリシャ語で記しているわけですから、日本語の表現では「御機嫌よう」みたいなものかと思います。

彼らが恐れおののき、驚いたのは、そのイエス様の言葉ではなくて、むしろどこからか、急に彼らの中に現れた、ということだったかと思います。いや、当時の一般家屋の室内は部屋も狭く、明かりも暗かったでしょうから、そんな部屋に大勢の人がひしめき合っていたと考えれば、誰かが外から入って来ても気が付かないということもあったかもしれません。しかし、その人が3日前に十字架で殺された、あのイエス様だと気が付くと、彼らは恐ろしさに怯え、これは^{おび}霊じゃないかと思ったわけです。

現代でも「幽霊を見たことがある」と言う人がいたり、「幽霊なんていない」

と言う人がいたりするのと同じように、2000 年前のユダヤ教社会の中でも、「復活も天使も霊もない」と言う人たちもいました（使徒 23:8）。さらに「いるかもしれない」と思っていたとしても、実際には見たことがなかったのでしょうから、驚いても無理はありません。39 節にある「私の手と足を見なさい。まさしく私だ。触ってよく見なさい。霊には肉も骨もないが、あなたがたが見ているとおりに、私にはあるのだ」というイエス様の言葉は、それこそ「日本では幽霊には足がないと言われているけど、ほら見て見なさい。私には足があるでしょう」と言っているのとそっくりです。そしてイエス様は、さらに「何か食べ物があるか」と言って、差し出された魚を食べたとも記されています。これらの表現は、イエス様の復活、死からの引き起こしは、単なるうわさや空想、作り話ではなく、本当の出来事だよ、真実だよ、ということをお話を聞く人々、読む人々に印象付ける表現だったのだらうと考えられます。

44 節以降もイエス様の言葉は続きます。「私がまだあなたがたと一緒にいたときに、語って聞かせた言葉は、こうであった。すなわち、私についてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてあることは、必ずすべて実現する」……。ここで言われている「モーセの律法と預言者の書と詩編」というのは、キリスト教の中では「旧約聖書」と呼ばれて来て、今日では私たちが「ヘブライ語聖書」と呼んでいる、ユダヤ教の『聖書』全体のことを表す呼び方でした。ですから、ヘブライ語聖書全体を通して、イエス・キリストについて書かれていたことは全て実現した。キリストは受難し、三日目に復活する。今、あなた方はそれを見ている、あなた方はその証人、証し人なのだ、と。さらに 47 節では「また、その名によって罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まって、すべての民族に宣べ伝えられる」とも言われていますが、これは言い換えれば、「キリストの名によって」は「キリストと共にあって」、「罪の赦しを得させる悔い改め」は「罪の赦しをもたらす低みからの見直し」が、全ての人々に告げ知らされる。あなた方が告げ知らせる。あなた方自身がその証人なんだよ、ということではないかと思えます。

続く 49 節では、「父が約束されたものをあなたがたに送る」と言って、来週のペンテコステへとつながって行く、「聖霊」について述べられています。しかし、この「聖霊」については、先に述べたよく分からない「幽霊」のようなものではなく、きちんと「高い所からの力」とも記されています。すなわち、「神様から与えられる力を受けて、勇気と実行力を持って、歩み出して行きなさい」ということ。言い換えれば、私たちも時に落ち込んだり、^{おび}怯えたり、^{ふさ}塞ぎ込んだりすることがあるわけですが、そ

んな私たちが再び元気を出して、勇気をもって立ち上がれるのは、そこに復活のキリスト、神様からの力である「聖霊」が共に働いているから、ということではないかと思えます。

そしてその後、イエス様は彼らをベタニアの方へと連れて行き、天に上げられた(50-51)とあります。同じ場面を記した『使徒言行録』では、「オリーブ山」で「天に上げられ、雲に覆われて見えなくなった」(1:9)とありますので、多くの絵画では雲の上に乗ってフワフワと上昇していったように描かれているのだと思えます。しかし、「雲や煙に覆われて」というのは、ヘブライ語聖書では神様がそこに現れているということを示す象徴的な表現です。そもそも、「天」とは、空の^{かなた}彼方のことではなく、神様がおられ生きて働いておられる所のことです。古代イスラエル人の感覚では、「神がおられる天」と「自分たち人間の暮らしている地上」は、一対のものとして考えられていたようです。そのために、イエス様が教えられたと伝えられている「主の祈り」でも、「御国が来ますように。御心が行われますように。天におけるように地の上にも」(マタイ6:10)と言われたのでしょう。ですから、イエス様が「天に上げられた」「天へと運ばれて行った」というのは、空高くに浮かび上がって行ったということではなく、「神様が働かれる場所へと移られた」ということなのだと思います。そのようにして、復活のキリストは弟子たちの前から姿を消しました。

しかし、彼らはイエス様を見失って意気消沈したのではなく、むしろ今も生きて働き続けている神様と共に、喜びに満ちてそこから歩み出して行きました。もしも、イエス様が姿を消さなかったら、彼らはどうなっていたでしょうか。もしかすると、イエス様を迫害して十字架につけて処刑した敵対者たちに対して、「見て見ろ、これがお前たちの処刑したイエス・キリストだ。お前達こそ真の神様に手を挙げた反逆者だ」と言って、イエス様を自分たちの正義を証明するための「証拠」のようにして利用し、独占、独り占めしてしまったのではないかと、私は想像します。

「真実から目を逸らさない」……。十字架で殺されたイエス様は、確かに死から引き起こされ、復活された。自分の手足を見せ、魚を食べて見せるほどに、確かに復活された。それは真実です。そしてまた、その復活され生きておられるイエス様は、「天」へと移られて、今はその姿は見えなくなった……。それも真実です。そして今も「聖霊」「力」となって、私たち全ての人たちの間に共に生きて、働いて下さっている……。それが「真実」なのではないでしょうか。

さて、現代を生きている私たちの身の回りでは、目を逸らしたくなるような出来事

ばかりがあります。この一週間だけでも、コロナ禍のどさくさに紛れて、憲法改悪へとつながる「国民投票法改正案」が衆議院本会議で可決され、来週には参議院の憲法審査会で審議入りし、今国会中に成立する見通しとなっています。また「国際的な人権基準を満たしていない」と国際的にも批判の多い、いわゆる「入管法」「出入国管理及び難民認定法」の改悪も、瀬戸際での審議が続けられています。

新型コロナウイルス対策では、日本政府はまともな対策をせずに、ただ自粛、我慢を強いているだけです。PCR 検査率もワクチン接種率も世界最低水準で、ワクチンが届いてないのに、接種計画だけを作って発表しています。まるで見たくない不都合な現実からは目を逸らし、責任逃れや言い訳の準備をしているようです。

国際情勢としては、イスラエルとパレスチナの武力衝突は、激しさを増し、ミサイル攻撃によって多くの市民が殺され、傷つけられています。国軍によるクーデターが起きたミャンマーでは依然として混乱が続き、軍事力による抑圧と虐殺、社会経済の崩壊が続いています。食料も何も流通が滞り、物価は何倍にも上がり、銀行にもお金がなく、人々は食べ物にも事欠く状況だと聞きます。そんな悲惨な状況に対して、自分には一体何が出来るのか。何をすればいいのか。何も出来ないじゃないか……。目を逸らしたくなる現実が、そこにはあります。

真実から目を逸らさない……。たとえ真実に目を向けることが辛くても、そこからしか真の歩みは始まりません。嘘の上に嘘をいくら積み重ねても、それは真実にはなりません。不都合な真実から目を逸らし、「自分たちにこそ正義がある」と言う時、私たちは神様を忘れて自分自身を絶対化してしまっていないでしょうか。「復活されたイエス様はここにいる、我らと共にある」と言う時、私たちは神様を自分都合で独占し、利用しているのではないのでしょうか。確かに復活され、そして天に移られたイエス様は、全ての人、全てのものと共におられます。私たちは出来ることの限られた、取るに足らない無力な一人一人ですが、そんな私たちであっても、私たちは神様からの命^{いのち}を受けて、力を受けて、私たちは今日もここから、全ての命と正義が守られる世界が実現されるために、神様の御心が実現する世界が作られるために、歩み出して行きます。

今日は、「アジア・エキュメニカル週間」です。「アジア祈祷日」「アジア・サンデー」とも呼ばれますが、ペンテコステの 1 週間前に、アジアの諸教会が、それぞれの教派教団を越えて共に歩むようにアジア・キリスト教協議会 (CCA) が、発足したことを記念する日曜日です。今日はそのことも覚えて、お祈りしたいと思います。